

学校経営のポイント

“指導行為”と児童・生徒の学習成果の点検

若井 彌一

年度末が近くなってきた。学校によっては、卒業式の持ち方の検討に入ったところもある。

節目となる行事を、どのように充実した内容のあるものにするかは大切な課題であるから、別の機会に述べることにして、今回は上記のテーマで述べてみたい。

児童・生徒の実態等の捉えは確かだったか

1年度をふり返るにあたり、まず確認したいことは、年度始めの段階で、児童・生徒の実態の捉えはどれだけの確になされていたかということである。

学習指導要領の総則の部分には、教育課程編成の一般方針が述べられているが、そこでは「児童（生徒）の人間として調和のとれた育成を目指し、地域や学校の実態及び児童（生徒）の心身の発達段階や特性を十分考慮して」、適切な教育課程を編成するものとするとしている。

「児童（生徒）の心身の発達段階や特性」の捉え方が、どれだけ具体的なものであるかが、その後の一人ひとりの児童・生徒の指導活動の内容・方法とその効果をも左右することになるかの解説は、釈迦に説法であろうから省略したい。

ただ、強調しておきたいのは、学級児童・生徒全体として「およそ、こんな状態」という程度の把握に満足せず、一人ひとりの児童・生徒の実態を年度始めにどこまで捉えていたか、という点検である。

『学校要覧』等では、抽象度の高い表現で「本校の児童（生徒）の実態」が説明されているのが一般的であり、A校、B校、C校等、多くの学校間での互換性が高いとの印象が強い。

そのこと自体が間違っているのではない。肝心なことは、そのような抽象度の高い表現に集約される基礎になっているはずの個々の児童・生徒の実態がどれだけ具体的に捉えられているか、である。医療行為で「見立て」の正確さの程度は、のちの治療内容・方法を決めていく重要な鍵である。

個々の児童・生徒の個性・実態が教育言説では強調されているが、実践的に、わが校ではどこまで徹底できているか、点検していただきたい。

学習成果は第三者にも理解可能な内容か

1年間のあれこれの「教育」活動（具体的には指導行為）を通して、どれだけの成果が得られたか。指導行為 指導効果と単純化して考えることも可能かもしれないが、指導行為がそのまま成果として実るわけではなく、児童・生徒の「学習」活動としてその結果が確認されるのであるから、学習成果の確認という説明になろう。

学習成果の確認は、数値表現、文章記述、標語表現等が一般的であるが、指導者と児童・生徒およびその保護者以外の人々にも理解できるような内容であるようにするための配慮が期待される。

仮に、どのようにでも解釈できるような抽象性の高い表現をすとしても、基礎になるべき事実は、必要な範囲で可能な限り整えられていることが今日的要請である。

（わかい・やいち = 上越教育大学教授）

...本紙は、購読料不要です。配信の中止・FAX番号変更等の場合は、抹消・登録に必要な宛先、新・旧FAX番号、等を必ずご明記くださるようお願いいたします。

●新刊ご案内●

最新刊 好評発売中！

教育開発研究所刊

★領域・項目ごとに添付した「自己点検・自己評価表」から自校の評価表を作成できる！

【編集】高階玲治（ベネッセ教育総研東京所長）／A5判 216頁・定価 2310円

『学校の自己点検・自己評価の進め方』

研修誌・図書の小社への直接注文は、無料FAX 0120-462-488をご利用ください（24時間受付・即日発送）